
waltz

ロスト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

w a l t z

【Nコード】

N 3 8 5 5 S

【作者名】

ロスト

【あらすじ】

何もかもつまらない世界。

何もかも最悪な日常。

そんな最悪な事を忘れられる心安らげるあの丘の上へ俺は向かった。

でも今日の丘の上は何処か少し、いつもと違っていた。

丘の上へ。

何もかも上手く行かない世界。

なんてつまらないんだろうか。

俺はどうして生きてるんだろうか。

高校に行けば最高に退屈な授業に最高にウザいだけのクラスメイト…

貧乏丸出しのボロ家に帰れば父親と離婚して精神がおかしくなってる母親がいる。

何から何まで最悪だった。

気が休まる場所なんて無かった。

…いや、一つだけある。

昔通ってた小学校の裏にある丘。

どうしてかは分からないけど、あそこに行けば最悪な日常を一時的に忘れる事が出来た。

そうだ。今日はあの丘に行こう。

俺は制服のまま、そこに向かった。

丘の上で。

見慣れた丘の上の景色。

だけど、少しだけいつもと違う景色。

丘の上、中央に一つだけあるベンチ。

いつもは俺がそこに座りばーっと回りを眺めてるのだが、今日はそこに先客がいた。

見た所、うちの高校の女子生徒か。

彼女は先ほどからぶつぶつと独り言を言っている。

なんか面倒くさそうだから出来れば関わり会いにならなくなかった。

幸い、彼女はこちらに気付いていない様だ。

俺は彼女から距離を取るために端の方まで行き、転落防止用の低い柵の上に座った。

やはりここから眺める景色は良い。

汚い世界を少しだけ綺麗に見せてくれる。

俺はタバコを手に取りライターを取り出し火をつけようとした。

だが、そうは行かなかった。

誰かが俺の手を押さえた。

まあ、「誰かが」といってもここにいるのは俺ともう一人しかないないんだが。

そう。さっきまでベンチに座りぶつぶつと独り言を言っていた彼女だ。

俺はライターをしまった。

そしてそのまま無言でその場から立ち去ろうとした。

「この場所が好きなんです。だから、だから…」

彼女の方から声が聞こえた。

俺は彼女に向き直り「ああ、悪かった。」と言ってベンチに座る。

「俺も好きなんだよ、ここ。」

そう言って俺はベンチに寝そべった。

「あのー…」

「なんか用？」

「暇だったらおしゃべりしませんか？」

「あー別に良いけど、そんな所に立ってられると困る。見えるぞ。」

俺は今ベンチの上で寝ている状態な訳で、彼女が立っているのは俺の顔の近くな訳で、彼女は制服だからスカートな訳で…

「あっ！」と言って彼女は両手でスカートを押さえた。

「ちょっと勿体なかったかな、一回見てから言うんだった。」

俺が意地悪そうにそう言うとな彼女は顔を赤らめていた。

「あの…もしかして…『ヘンタイ』ですか？」

なんというストレート…っーかそんな真剣な顔で聞くな。

「私『ヘンタイ』に会ったのは初めてです。もしかしたら、あんな事やこんな事されちゃうんでしょうか？」

「本人に聞いてどうするんだ…俺があんな事やこんな事するって言ったらどうすんだよ？」

「お断りします。」

ですよ…。

「あっ、そう言えばまだ名前言ってませんでした。私、しろざわ【城沢 夢】ゆめって言います。よろしくお願いします。」

「俺はふゆかわ【冬川 白斗】はくと。よろしく。」

俺達はその後、辺りが暗くなるまで話しをしていた。

まあ専ら世間話だったけど。

それにしても、久し振りに人と接した気がする。

長時間人と話しをするなんて実に数年振り位だ。

あいつと話していたら嫌な事も忘れてしまっていた。

だが、家に帰ると現実には引き戻された。

母親がナイフを自分の手首に当て、切ろうとしていた。

「何しようとしてんだあんた?!」

俺は母親に駆け寄り、持っていたナイフを取り上げた。

「白斗、それで私を殺して欲しい。」

俺の心は訳の分からない感情で一杯になった。

俺はナイフを投げ捨て「ふざけんなよ」と言って二階の自分の部屋

に逃げ込むように入った。

退屈な休日。

俺はいつの間にか眠ってしまっていた。

時計を見ると深夜三時だった。

もう一度眠りにつこうと思い目を閉じると、ふと思い出す昨日の事。

「『城沢 夢』…か。良い名前だな…。」

独り言を良いながら窓から夜空を見上げる。

明日もあの場所にあの子はあるだろうか？

そんな事を考えながら俺は眠りについた。

そして朝がやってくる。

今日は学校は休みだ。

家にいると気が滅入るから休みの日はいつもふらふらとそこら辺を歩いたり、ファミレスに行ったりしている。

さて、歯も磨いたし、服も着替えたし、どっかふらつくとするか。

取り敢えず街に向かった。

何も無い場所だけど、家にいて重い空気に耐えているよりかは街をふらついていた方が余程良い。

だが、本当にやる事が無い。

趣味も無いし、友達も少ないし、ましてや彼女なんていない俺にとって休みの日は苦痛でしか無かった。

尤も、学校にいても苦痛なんだが。

そんな事を考えながら歩いているといつの間にかあの丘に来てしまっていた。

「どんだけこの場所が好きなんだよ俺は…」

そう独り言を言ってベンチに座る俺。

ぼーっとして空を見上げる。

風が気持ちいい。

そういえば、丘と山の違いってなんなのだろうか？

山より低いのが丘と言われてはいるけど、そんな事言ったらエベレストより低いのは全部丘って事に…って、なんて下らない事考えてんだ俺は…。

あー暇だ。

毎週、毎週こんなだよ…

俺も一回は楽しい休日ってのを送ってみてえよ…

こうなったら無理矢理あいつの家行って相手してもらうしかねえな。

「つーことでおじゃまします。」

「つーことでってどういう事?!俺何も聞かされて無いんだけど?!」

俺は無理矢理家に上がった。

「テメーこの栄さかえ 利樹としき様の家に勝手に上がるとは…タダじゃおかねえ！」

「相変わらず冴えねえ名前だなお前。」

「相変わらずって別に名前は変わったりする訳じゃ無いからね?! 分かってる?!」

「今日からお前の名前たかしでいいや。」

「冴えねえ! 俺が言うのもなんだけど冴えねえ! ていうか俺の名前馬鹿にすんなよな!」

という事で、今こいつの家にいる訳だが、やっぱりやる事が無い。

「暇だしどっか行くか?」

取り敢えず誘ってみる。

「へ? 良いけど? どこ行くよ?」

「腹減ったしファミレスでも行くか？」

「さんせーい！行こうぜー」

ファミレスに来て扉を開けるとそこには昨日あの丘で会ったあいつがいた。

「いらっしやいませー！あれ？昨日のヘンタイさんじゃ無いですか！」

こいつは人前で何を言っているんだろうか。

「お、おう。お、お前こんなところでバイトしてたんだな、し、知らなかったよ。」

俺は半ギレ状態で言葉を返した。

「え！何？君達知り合いな訳？もしかして付き合ってるのか？！こんな可愛い子と付き合えるなんてお前の人生まんざらでも無いんじゃない？」

やないか？あ、あれ？いねえし…」

「ヘンタイさんならもうあっちの席に行っちゃいましたよ？」

俺は栄のつまらない冗談を無視して一番奥の席に座った。

取り敢えずタバコに火をつける。

「あー！高校生がタバコ吸ってるー！」

栄が俺の前の席に座る。

「お前俺がタバコ吸ってるの知ってんだろーが。」

「何となくノリで言ってみただけだしー。そういえばさーお前の親は注意したりしないの？」

「親の話はやめろよ。気分が悪くなる。」

「お前いつもそうだよなー。なんで親の話はしたがない訳？」

「知るかよ。」

「たまには話してくれても…」

「うっせえって言ってんだろ！」

机を叩き声を荒げる俺。

二人の間に沈黙が流れる。

親の話になると俺はつい感情的になってしまう。

あんな親の事、誰にも話したくなんかない。

「俺、帰るわ。」

そう一言栄に伝え俺は店を出た。

そしてやはり俺はこの場所に来ていた。

ただただ空を見上げる。

そして冷静になった時、ふと後悔する。
もっと感情を押さえられたんじゃないか、我慢出来たんじゃないか、
色々な事を考えてしまう。

でも、あいつがしつこく聞いてこなかったら俺がキレる事も無かったのに。

…子供か俺は。

「…ーん…さーん！」

ん？遠くから声が聞こえる。

「ヘンタイさーん！」

城沢か…

「お前いい加減俺の名前覚えろよ！っていうか何しに来たんだ？」

「何しに来たなんて、酷いですよ！探したんですから！」

「探してくれなんて言った覚えは無い。」

「あーっ！そんな事言うんですね！」

「な、何だよ？」

「もう良いです！」

「お、おいちょっと待ってっ！」

「待ちません！探してくれなんて頼まれて無いらしいですから！」

「悪かった！謝るから！な？」

「じゃあそこに座りなさい！」

「は、はい！」

俺はこの後みっちり説教された。

平穏な時間。

『…あの日の事覚えてる?』

あの日の事?

『忘れちゃったんだ』

忘れたも何も、そんな事いきなり聞かれてすぐに答えられない。

『ばいばい。』

おい! ちょっと待てよ!

「…はっ!? はあはあ…夢だったのか?」

カーテンを開くと朝の日差しが差し込んで来た。

目をしかめ空を見上げる。

空は気持ち悪いくらいに晴れ渡っていた。

「何なんだよさっきの夢は…」

目覚めの悪い朝だ。

いつも通り俺は洗面所に行き、顔を洗う。

いつも通り着替えを済ませ、登校する。

いつも通りどうでもいい授業を受け、昼飯を食べる。

いつも通り午後の授業が始まり、終わる。
そして放課後になり、帰宅する。

いつもと何も変わらない下らない日常。

「あ、冬川くん！」

でも最近一つだけ何も変わらない下らない日常に変化がおきた。

「別に待って無くていいのに」

それは、帰宅する時いつも城沢が一緒な事。

「待ってなんかいませんよー！」

付き合ってるとかそんなんじゃないけど、何故かこいつは俺と一緒に帰りたいがる。

まさかこいつ…

「俺の事が好きなのか？」

いたずらっぽく冗談混じりで聞いてみた。

「え！？でも、冬川くんにはもっと良い人がいると思うっていうか…何かその…」

「…俺は付き合ってくれとか言っていないんだけど。」

何故かちょっとへこんだ。

「え！そうなの！？告白されたかと思った。」

「お前が俺の事好きじゃないって分かっただけ良しとするよ。」

「えー何それひどい！」

こうして、平穏な時間は流れていった。

小さな幸せ。

春、夏…時は流れて季節は秋。

城沢が学校にこなくなってからもう一ヵ月か。

城沢の担任の教師は城沢が来れないのはとある事情があるからと言っていた。

城沢の担任の教師に城沢の家に行ってプリントを渡してほしいと言われた。

…そういえば、あいつと一緒に帰っていたのに俺はあいつの家を知らない。

俺はもう一度学校に戻った。

「あ、先生。」

「冬川君? どうしたの?」

「城沢の家が分からないので。地図か何か貰えますか?」

そして俺は城沢の家に向かった。

…ここが城沢の家か。

ピンポーン

「すみませーん。城沢さんいますかー。」

「夢のお友達ですか？」

「冬川って言います。城沢さんにプリントを持って来ました。」

「わざわざありがとうございます。渡しておきますね。」

「あ、あの！」

「あら、なんですか？」

何故俺はあんな事を言ってしまったんだろう。

俺は今城沢の部屋の前にいる。

お母さんに城沢に会わせてほしいと頼んだのだ。

緊張する。

手が震える。

恥ずかしながら女の子の部屋に入るのはこれが初めてなのだ。

コンコン

ドアをノックすると、中から「はい？」という声が聞こえた。

「冬川だ。入るぞ。」

ベッドに寝ている城沢の姿が目飛び込む。

「あ、あの…ごめんなさい。今起きるね。」

「無理するな。そのまま寝てろ。な？」

城沢は辛そうにしていた。

「大丈夫か？熱あるのか？」

「ち、ちよつとだけ…ね。でも大丈夫。」

「そっか…。」

一カ月も学校を休むってどんな病気なんだろうか。

一般的な風邪なら長くても一週間位で治るはず…

「なあ、城沢。」

「ただの風邪です。」

「俺はまだ何も…」

「何の病気が聞こうとしたんでしょ？」

分かっていたのか…

「中学生の時も皆聞いて来たもん。皆そうやって気まずそうな顔して聞くんだよね。」

「中学生の時？ こういう事が前にもあったのか？」

「身体が弱いから冷えて来るといつもこうなるの。毎年こうなってる。冬川くんにはまだ言ってなかったよね。ごめんね。」

「なあ、城沢。」

「だから風邪だって！ 何度も言わせないでよ！」

”風邪” が治ったら俺とデートしてくれないか？」

「え…？」

一体何を言ってるんだ俺は…

「う…うん。分かった。」

おいおい、まじかよ。

「じゃ、そういう事で！早く元気になれよな！」

急に恥ずかしくなり、話を無理矢理切り上げて急いで外に出た。

二階を見上げると、部屋の窓から城沢が手を振っていた。

思わず俺も手を振った。

何なんだろうこの幸せな気持ちは…

俺は少しだけ、このつまらない世界を見直した。

春の訪れ

「はぁはぁ…夢、か。」

眠りから覚めると、俺の全身が汗で濡れていた。

俺は夢を見ていた。

城沢が悪魔のような何かに襲われる夢を。

誰もあいつを助けない。

俺は声を出したくても声を出せない。

ただ襲われている城沢を見ているだけだった。

今日は学校は休み。

外は雨だった。

俺はベッドの上でぼーとしながら天井を眺めていた。

さっきの夢を思いだし頭を横に振る。

こんなに暇だと、考えなくていい事を延々と考えてしまう。

城沢の病気は本当はなんなのか？

母さんはいつになったら元に戻ってくれるのだろうか？

どうして最近変な夢ばかり見るのか？

「くっそ！」

俺は部屋の壁を思い切り殴った。

俺は傘を差し外に出た。

何を思ったか俺の足は城沢の家に向かっていた。

そして、家の前に着くとインターホンを押した。

「あら、冬川君？どうしたの？」

「城沢さんの様子を見に来ました。」

俺は家に上がり城沢の部屋に向かった。

城沢は昨日より元気そうだった。

「冬川くんおはよう。」

「お、おう。」

「今日はどうしたの？」

「暇だから来た。」

強がって嘘を吐いた。

本当は無性に会いたくなっただからだ。

「デートはまだ出来ないよ？」

「そんなの分かってる。」

そして俺は城沢と軽く世間話をし、帰宅した。

それから俺は毎日城沢の家に通い続けた。

学校の帰り、休みの日、バイト帰り…雨の日も、雪の日も通い続けた。

だが城沢の体調は一向に良くならなかった。

俺は城沢に何もしてやれない。

もどかしさが俺を包んだ。

そして冬も終わり春になる。

何の目標もないまま気付けば俺は三年生だった。

始業式が終わった後、俺は久し振りにあの丘に向かった。

そこにはあの時と同じ風景があった。

ベンチの上で独り言を呟く女の子。

「城沢?!」

「あ、冬川くん!」

「外に出ても大丈夫なのか?」

「お医者さんがもう良いって言うてくれたから多分大丈夫!」

「良かった…本当に良かった…」

気付けば俺は城沢を抱き締めていた。

「冬川くん痛いよ、離して…」

「よし、じゃあ約束守って貰おうかな。」

「え…約束？」

「デート一回だ！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3855s/>

waltz

2011年10月8日17時25分発行